

門前町に生きる

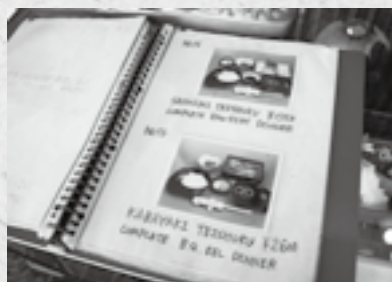
— 過去・現在・未来 —

第7回 景観の変容と国際化の浸透

門前町の景観は花崎町や上町では近年大きく変わってきた。セットバックによる移動に合わせて内装を整えた店、長く続いた鰻屋をパン屋に変えた店、果物屋をやめてワンルーム・マンションにした店など、さまざまである。成田空港の開港以来、門前町の中に深く浸透した国際化の動きが近年には加速した。特にワンルーム・マンションは、空港関係者の客室乗務員の需要が高まっていて、新築と同時に満室になることも多いと聞く。外国人にとっては、周囲に商業施設のない空港周辺と比べて、門前町は成田駅に近く店舗や飲食店が多くて相互に集まりやすい。無機質な郊外のマンションに住むよりは、門前町の雰囲気の中で暮らしたいと希望する。

成田空港の開港は門前町への訪問客を激増させた。参詣客は減少したが観光客は飛躍的に増大した。そして、外国人の訪問は確実に増え続けている。新勝寺を訪れた正月三が日の参拝者は1970年代には50万人程度であったが、現在では約300万人となった(『成田市統計書』(平成25年版)より)。この中には国際空港とセットにして成田を訪れる外国人が含まれる。門前町を歩くと多くの外国人とすれ違い、店舗側も英語表記のメニューや看板を用意した所が増えた。午後5時過ぎになると外国人だけでいっぱいになる居酒屋やパブ、外国の航空会社のクルー御用達のお店、インターネットを通じて外国人によく知られたラーメン店なども出現している。乾物屋、荒物屋、団子屋

など一見するとローカルな店が外国人には物珍しく映り、売り上げを増加させている。田町にある伝統的な「旅館」も外国人に好評である。和室6畳の部屋に泊まり、仏壇



英語で和食を紹介するメニュー



門前町で営業する外国人

と神棚に手を合わせ、兜や大名駕籠を見て昔に思いをはせる。外国人にとってはエキゾチックな文化的空間である。この旅館には国際空港の開業前に、旅行ガイドの大手のロンリープラネットが事前に取材に来て、「旅館」ではなく「リョカン」として観光客を受け入れるかを尋ねられ、快諾したので多くの外国人に知られるようになった。そのほかにも、若者向きで、バックパッカー用の安価な宿泊所も数軒できている。

外国人が経営し日本人が利用する店舗も増えた。花崎町の韓国料理店の女性店主によれば、顧客は成田山の参拝客よりも、成田市民や空港関係者が多いという。成田の内部と外部のホストとゲストの関係は時には逆転するようになった。国籍や出自に縛られない自由で闊達なコスモポリタンの空間が、門前町の一角に生まれつつある。ブラジル料理店の男性店主は成田は外国人に慣れているので暮らしやすいという。外国人には成田は居心地がいいようだ。ただし、外国人は、若者衆や旦那衆、女人講といった伝統的な町内の組織に加入していない。加入に際しては門前町に住み続けることも条件である。国際化を組織内部まで浸透させるには、町内に住んでいる人に限定せず、テナントとして店を借りているだけの人や、働きに来ている人も加入できるようにすることも必要である。

門前町は外部の人を呼び寄せ、外部の文化を受け入れることで発展してきた。門前町の内と外の交流と混交は、モダンとレトロの微妙な結合をつくり上げ、現代人のノスタルジアという情動を刺戟し続けてきた。今後も成田の異種混交の風景を、内外の人が入り混じるダイナミックな視点を通して明らかにしてみたい。(藤野陽平)

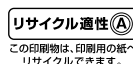
編集後記

「グランドピアノを弾いてみませんか」取材しました。参加した女子中学生は、ピアノの譜面台にタブレット端末を置いて演奏していました。楽譜はありません。タブレットの画面には、真上から見た鍵盤とヒット曲「レット・イット・ゴー」を演奏する手の動きが映し出されます。それを見ながら鍵盤上で軽やかに指を踊らせる姿に、携帯電話はガラケーでスマホさえ持たないわたしは、技術の進歩に感心しながらカメラを向けました。

平成27年2月15日号 No.1285

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。